



夏沢峠より小屋の間を山小屋の主人に挨拶して通り抜け、オレン小屋の道を左に分け、シラビツの樹林の間を次第にゆるやかに登って行く。ピークより左へ曲り、ゆるく下り、ゆるく登り、山はくさくさ、冠山をサッと下れば根石山荘分岐へ着く。

大ケルミの鞍部には硫黄岳石室が静かに伏している。この先高山植物保護用柵の間を大きく左へ回り込むようにして、ゆるやかな登りに入る。No.4～No.1と頂上大ケルミ道標のある避難小屋前の山頂付近へザックを置く。岩礫の大きな平頂峰丸山といった感じのダダ広い見晴し方角の頂上だ。

アルペン的急峻な横岳主峰で写真も撮ってから長くさり場しかの横道に続くけり場を通過し、ケルミの立つピーク、続く尾根上のピークを左へ回り込むとゆるやかな良道となる。高山植物保護用柵の間を散策しながら、ゆっくり下って行く。夏なるコマクサ、シツナガ、チシギキョウ等の群落が見事だぞと思えば、

日ノ出岳の道標より左側(諏訪側)へ、雪で滑り急斜面をくさりに掴み巻いて下る。次は「くさり」ぶらぶら下りながら鈴岳へよし登る。巻の上ははなはな尾根へ出る。

360°の眺望、飽くほど眺めた富士山を背に下りに入る。昨夜降った積雪20～30cmの踏み固められた斜面はツルツル……滑つたらしあの世行き……ここは小屋裏に時間をかけて……先に……ハイマツに掴まり低い姿勢で少しづつ下る。

八ヶ岳連峰最高の赤岳、赤褐色の風化した山肌、北岳に似る容姿、堂々とした山だ。

硫黄岳噴火口の絶壁に立つ。対岸は切り立つ大岩壁で西部劇に見られる殺伐たさ状果に似て、インデアンが現れるような雰囲気になる。硫黄の臭いがプンプン鼻につく下りを、樹林帯の中へ突込めば、もう夏沢峠だ。

二十三日の登りより、いよいよ横岳の稜線へ入る。風化したガリガリの岩峰がヤセ尾根に盛り上がり、峻峻な横岳を造っている。始めは右側(佐久側)に登るが、大岩壁の直下、落石注意の表示板より斜盤状の岩場に渡された大ききり場を登った所で写真も撮る(9:02～9:13)相変わらず富士山の姿を……写真も撮ってから右へ左へと群峰を登って日ノ出岳に立つ。

早朝の様子。真白な綿のような雲海  
10月26日、日の出6:01、快晴、気温-4℃、風速1m/s  
4時に目が覚める。5時過ぎ「東」が明るくなったので外へ出る。頂上周囲は雲海が拡がり見事な光景にびっぴり。車は奥秩父の山が手の届く近さな小島のように三つ浮かんでいる。その右(南側)には秀麗3776mの富士が雪を載って葉いもあつたに美しくせまり画のようだ。南アは北岳が大きく岩壁を盛り上げ、甲斐駒～仙丈ヶ岳がズーッと裾を引いて大きさを誇っている。西北の北アは、槍の尖峰を中心に、雲海の彼方に左右連々と横たわり、まるで氷山のような。北は浅間山が白煙をたなびかせて大海を航行する船のように見える。

すっかり明るくなり、いよいよ秩父山地の中央より、真紅の太陽が壮麗な輝きを放つ。周囲の山々は生きかえったように赤く染まり、金色、銀色に輝き始める。何人とも美しい素晴らしい朝だ。この瞬間を息をこらえて見まもる山男たちの顔も真剣だ。寒さも忘れ茫然と岩峰に立つ貴重な一瞬よ……

根石山荘分岐より登り易い「ザウ」道の根石岳へ、アッという間に頂上だ。アベックや単独行の女の子も追いついて、今度は石コロの下りだ。続く斜面のトラバースを下ってゴルへ着く。

10月末の山歩きは、ほんとに静かだ。歩いていて丁度よい気分だ。長い休憩は寒いから歩いている間は休む。歩いている間は休む。体温の調節をしながら歩く。馬刺した足には天狗の登りも楽なものだ。双耳峰の天狗岳へグングンせまり、ヤセ尾根を通過して、赤銅色の天狗の顔に似た天狗岩の首元へ着く。

黒百合ヒュッテから唐沢温泉の道の途中、湯水の沢で、黒い、ツルツルの石を飛びながらの難行苦行、ほんとに由断のときな、下りだ。

帰り

茅野 松本  
21日 18:46 → 19:30 → 馬前旅館で宿泊 26日夜  
27日 早朝 6:02 → 大糸線 篠原着 7:39  
27日は紅葉の中、白馬、渡島、槍ヶ岳を仰ぎながら、青木湖、中細湖、木崎湖を巡り、海ノ口よりバスで信濃大町へ、大町からつがひバス15:26発 → 石小屋着 16:06

バス時刻表

渋ノ湯 → 茅野駅	17:00 → 18:18
7:35 → 8:38	
10:05 → 11:23	19:05 → 20:23
14:40 → 15:58	